唐代文人の信仰の一類型

——白居易の場合——

篠　原　壽　雄

白居易（七七二—八四六）が熱心な佛教信者であつたことは、既に多くの先人の論及するところである。佛傳にも逸話——例えば鳥窠道林との問答[1]が記されて世に傳わり、また七十卷に及ぶ文集の中にも佛教・禪に關するものが極めて多く、彼の信仰をうつしえている。それにもかかわらず、白居易文學の研究においては、佛教との關連、特に佛教が彼の文學にいかに關係し、また影響を與えたか、などという問題について論及するものは少い。いま問題を居易の文學と佛教——わけても禪信奉者といわれた居易が、晩年になつてなぜ淨土教の信奉者になつたか。いかなる彼の精神生活がいわゆる——もちろん純粋な意味ではないが——宗教的回信をなさしめたか。これらを中心にして考えてみたい。

佛教が六朝を經て唐代になると、曾ての教學的なそれは衰退し、より中國社會に根を下し士大夫の教養としての佛教となり佛典となつてきた。このことは士大夫が自らの思想を深くする爲に佛教に親しみ佛典を讀み、僧侶と交わりをもつにいたり、その結果として多くの居士の輩出を見たことによつても充分窺える。しかも、これら居士たちは、次第に佛教の重要な擔い手となつてきた。白居易の時代以降は、このことが一層顯著になる。

ところで、居士がひろく宗教に佛教に關心をもつことは、人間性への自覺の高まりである。儒家の經典は主として人の世の解脱の問題にはふれぬ。人間苦を煩悶を憂愁を解決しようと目指すもの、いわずとそれは佛教である。ここにおいて儒家の經典にては味得できぬものを、無限の佛智を通して學ぶことを欲するわけである。このことは彼の時代と、そのおかれた立場を無視しては到底考えられない。彼の出生の時代は、安史の亂を去る僅か七年の後（七七二年）であり、社會の大きく變貌する過渡期のけわしい世相を現わしていたが、反面、寒族出身者にも科擧の門が開かれていた時代でもあつた。居易は二九歳の年、貞元十六年（八〇〇）に進士に及第している。

次に、やがて居易の魂をとらえてやまぬ禪の世界について述べよう。

居易の文學を通して看られるのは、著しく濃厚な南宗禪の色彩である。この派の主張は頓悟によつて要約されるが、いまこの立場を最も端的に示す語をあげれば、卽心卽佛・非心非佛である。この嚴しい立場は、唐代には馬祖道一[2]（七〇九―七八八）によつて强調された。居易が師と仰ぎ道交を結ぶ法友に如滿[3]がおるが、彼こそは馬祖の法嗣である。したがつて馬祖によつて强調された南宗禪の立場は、そのまま如滿に承けつがれ居易の精神の大きな糧になつたことは論をまたぬところである。

馬祖は峻峭な禪機もて百丈懷悔[4]（七二〇―八一四）を打出している。百丈は禪院を開創し規矩を整え、世にいう百丈清規を撰述し、もつて禪門の獨立を全うした。ここに禪宗は名實ともに一宗としての勢威を示し、同時に教團としての成立をみたわけである。多くの衆を容れる堂宇も、これを整える清規も、要するに南宗の禪風が、これを必要とするに到つたことを示す。また此の頃、かの神秀の北宗禪を排擊し、獨り南宗の正統を標傍して活躍した荷澤神會（――七六八）がおり、寶林傳[5]、永嘉集[6]の編纂などもあり、また獨自の歩みをのこした龐居士などを併せ考えれば、當時の南宗禪はより理解されよう。同時に、この禪風の士大夫に與えた影響のはかりしれぬものをもつ趨勢も理解に難くない。

これらのうち特に居易に與えた最も大な禪の影響を示す語を、馬祖のことばから抄出してみよう。

若頓悟二自心一、本來清淨、元無二煩惱一、無漏智性、本自具足、此心清淨、畢竟無レ異、（禪源諸詮集都序、卷上の一）[7]

每謂レ衆曰、汝今各信二自心是佛一、此心卽是佛心、是故達摩大師、從二南天竺國一來、傳二上乘一心之法一、令二汝開悟一、（祖堂集四、道一章）[8]

夫求レ法者、應レ無レ所レ求、心外無二別佛一、佛外無二別心一、（同前）

これらの精神は如滿との親交を通じて、これまでの彼の精神の支えであつた儒學、また老莊の學によつて培われてきた精神生活の内部へ、徐々に滲透していつた。いま、如上の禪風の影響のあとをとどめるものを、比較的若い頃の作品から記して考察の資にしたい。

元和五年、居易の三九歲の時の作、

（上文略）空門の法を學ばずんば、老病死苦の惱みは脫しえられぬ。無生の心を悟得しなければ、白頭になるも夭死したのと同じである（早梳レ頭）[9]

この頃以降、禪・佛敎に關する詩作が多い。丁度ころ三歲になる長女の金鑾を亡くしている。悲歎にくれる居易は四十歲であつた。作品に佛語禪語が豐富に用いられ、これらをもつておのが心情を吐露するのは、果して偶然であろうか。

南宗の禪風に、次第に心をひかれてきたことを示す作品、

（上文略）早年には身代を以て、直ちに逍遙の篇に赴き、近歳は心地をもつて、廻つて南宗の禪に向う。外は世間の法に順うも、心は區中の緣を超脫す。進んでは朝市を厭わず、退いては人寰を戀わざる境地にいたつた。此の境地を得てより、足を投うじて安んぜざるはなく、體は道引によらずとも適い、心は江湖にいなくとも穩かである。（下略）

杓直に贈る詩[10]、元和十年、居易の四四歳の作である。既にこの頃の居易の歩みの中には、單に佛語を詩作にみごとに應用するだけではなく、もちろん觀念的な語句をもつて詩の構成をなすのでもない。人間苦を認めて、ここに惱む居易を看るわけである。卽ち、南宗禪を信奉する居易にとつて、既に佛敎・禪は人の世の矛盾と苦惱にうちひしがれたものが、己の魂の淨化を目指す敎義であり、同時に彼の實踐ともなつてきたのである。

ところで、禪宗六祖の慧能に大鑑禪師の號が諡られたのは、くしくも「贈杓直詩」の作られた年、元和十年である。南宗の禪風が愈〻中國の佛敎界に根を下し、その宗勢をほこる頃、居易はとみに禪に關心を示す。

賴いに禪門の非想定を學び、千愁も萬念も一時に空し。（晏坐閑吟[11]）

とは、彼の自得の境を示すものである。また、

菩提は處所なく、文言はもと空虛なり。指を見るは月を知るに非ず、筌を忘れてここに魚を得。（和季澧州題韋開州經藏詩[12]）

と、悟境を文字に托くす。元和十四年、四八歳、忠州における作である。

指月の喩えは、彼の『楞伽經』の「如下愚見レ指レ月、觀レ指不ヒ觀レ月、計二著名字一者、不レ見二我眞實一」の偈、また「忘筌」は『莊子・外物篇』に據るが、共に禪者の好んで用いるところである。先人の語におのが心境を托くしつつも、「菩提もと處所なく、文字もと空虛」と、達人の心境を示す。

「人をして見れば卽心無事ならしめ、一たび逢うごとに常に道場」（贈僧三、自遠禪師[13]）

太和六年の作、自遠禪師なる坐禪をもつて名聲の高い僧の風貌をえがいて、深遠な禪理を聽くまでもなしに、師と對坐して禪寺にいるだけで氣持が淸淨になり、一時に煩惱が消え失せていく。また俗の世の諸々の憂愁もうせて、身も泰く心も安らけくなるさまをえがいて同時に禪僧の接化ぶりを髣髴とさせる。

居易の六三歳、太和八年の折りに、禪宗經典を讀んだ境地を托くす詩「讀禪經[14]」を揭げる。

須らく知るべし諸相はみな相にあらず、若し無餘に住せば却つて有餘、……攝動はこれ禪、禪はこれ動、不禪不動卽ち如々。

ここには禪理を求め、禪理の理解につとめる居易を見出す。

この謂は、次の詩、即ち翌々年、開成元年の作「送李滁州詩」[15]が示している。

君は覺路に深く意を留め、我もまた禪門に薄か功を致した（身でも）、いまだ病を悟らぬうちに、先ず病を除くべく、すでに萬事空なることを悟ったからには、空に執著すべきではない。

南宗の主體性の強い禪風が窺えよう。しかし、このように禪に傾倒してきた居易にも、詩を捨てきることのできぬ己を「自解」[16]が示している。いうまでもなく進士の、居士の宿命であり、赤裸々な居易の歩みでさえあるが、この當時の居易の歩みは複雜である。

居易が禪に志向したさまを概觀したが、彼における自己救濟のねがい――おのれひとりが救われようとする精神生活を探らなければならぬ。それは居易が淨土教に對する關心を考察することを始めとする。

壯年時代の詩に、淨土教の思想を窮わしめるものは殆ど見當らぬが、江州における元和十三年、四七歳の時の作に、

「先ず西方極樂淨土に行つて、その主人とならんことを請うがよい」[17]

と東西二林寺の僧に示したものが見える。なお、この一年前に江州に左遷されたおのが心情をなぐさめて「西方社内の人となる」〔臨水坐〕[18]ともいつている。さらに、太和八年、六三歳の作に「畫彌勒上生幀讃并序」[19]がある。ここには「願くは我れ來生、一時に上生せん」とうたい、間もなく作つた「繡西方幀讃并序」[20]にも明かに淨土教に志向している彼を知る。

これらの詩作と相前後して、彼の愛息崔兒が死ぬ。時に居易六十歳、太和五年初秋のことである。やがて「東林寺白氏文集記」[21]を作る心境には、文集を托くすべき者をうしなつた彼が、晋の慧遠の例にならつて己の文集を托くそうとする必死のねがいがこめられている。翌開成元年にも洛陽の聖善寺に六十五卷の文集を奉納[22]しているが、前年の詩作とことなり「文集の因緣によつて來生の緣を結ぶ」願いが強くうたわれている。

更に開成四年には六十七卷を編集して蘇州の南禪院に奉納[23]している。ここにも彼は

「將來世世、佛乘を讃じて法輪を轉ずる緣とならんことを」

と語をつくして、ひたすらな願いをこめている。翌開成五年、居易六九歳の春に、畫家の杜宗敬に錢三萬を拂つて、阿彌陀佛西方淨土の繪を畫かせて[24]

「願くはこの功德もて一切衆生に廻施して、一切衆生と我と同樣に老いたるもの、病めるものをして、願くはみな苦を離れて樂をえ、惡を斷じて善を修せんことを」

と、心をこめて祈つている。

ほぼ同じ頃、本來佛である彌勒の天國の繪を畫かせている。即ち、「畫彌勒上生幀記」[25]は、かくすることが、彼の救

われる唯一の道であるとする、その心境が委曲をつくして述べている。

この一年前、開成四年十月五日に居易は風疾に倒れている。これをもつてしても、先の彼の願いが如何に切實にして、必死のものであつたか知りうる。

會昌元年、七十才の年には「六讚偈并序」[26]をものしている。また翌年には「歸えらば卽ち應に兜率天に歸るべし」[27]といつている。西方淨土に生れかわることを熱望している居易のすがたを、明らかにここに見出す。

壯年より禪に親しみ、いま晩年にいたつて淨土を欣求する彼の精神生活の一端――それは回信といいうるものを窺つたが、このことは居易とその文學を理解する上に、恐らく缺くことの出來ぬことであろう。ここにおいて、先の意味における回信をなさしめたものの要因を考えなければならぬ。

曾ては、死に執著することを捨てよ、捨てることをも捨てよ、と說く禪の教義が居易の教養になつていた。しかし、いま事情はかわつて、愛兒を始めとして親友・劉禹錫・元微之・崔羣・崔玄亮[28]らの死に直面した。老の身に病もつのり先の親友たちの訃音を見て、まだ見ぬ世界にあこがれ、この世界を欣求し、これを信ずれば己が苦惱は救われる、と說く教えに接近することは充分考えられる。先に述べた長女の死を契機として、詩文に佛語が頻繁に用いられ、やがて禪に傾倒してきた居易を考えれば、老いて遭遇した死を機に淨土教を信ずるにいたることも不自然ではない。

居士は出家者とことなり、實踐修行ではなしに學解として佛教に參ずるのが通例であるから、當時の經典について考えを進めよう。當時、ひろく一般に流布し讀誦されていた經典は、南北朝の初期、畺良耶舍によつて譯出された『觀無量壽經』である。この經典は禪淨一致の精神を窮わせるものであるとは、既に諸家によつて說かれている。また、この經典は淨土教系の根本宗典の一として、以降の佛教界に大きな影響を與えた。したがつて、この經典の彼に與えた感化の大きいことも充分注目に値しよう。

別の視點から考えると、中唐の頃、長安附近にはいわゆる長安佛教の傳統があつた。長安は唐初において善導らが熱心に淨土教の布教を展開したところであり[29]、中唐には後善導とよばれる法照・少康らが教化を垂れたところである。この風潮も、特に晩年の居易の歩みには影響を與えずにはおかぬ。彼ら居士は信仰の純一性をとわず、只今の救濟が最も欣求されるものであるから、當時の長安を中心とする佛教界の風潮に感化されていくことも首肯ける。まして、この頃の禪者にして念佛をなすものがおつたことを併せ考えれば、居士の中にかかる士のあらわれることも、豫想するに難くない。

先に、廬山にて慧遠の文集を敬畏の眼をもつて見て、この

故事にあやかつておのが文集の永生を心に強く念願した居易を見た。ところで、この慧遠こそは廬山の白蓮社の始祖であり、西方行者であり、淨土往生の行として般舟三昧を修した人である。[30] したがつて、文集の永生を願う居易が、淨土教の慧遠にあやかろうとする場合、同じく淨土教の世界を心にえがくことも極めて自然のなりゆきである。

また會昌二年の作「答客說」の中で「佛教を學び仙を學ぶのではない」といつているが、晩年のこの「仙を學ぶのではない」の一語は注目に値する。もちろん先述の「歸えらば卽ち應に兜率天に歸るべし」の句と共に考えなければならぬことは論をまたぬが、再びこの頃の禪を信奉者の側から考えてみよう。

この面からいえば、居易の信奉してきた馬祖系の禪は、唐朝の保守派中央官僚によつて支持され、政治的に正統派禪として成長しつつあつた、[31] いわゆる道家的な禪で、石頭系の儒家的色彩をもつ禪と對比せられるものであつた。

ひたむきにおのれ一箇の救濟を願つて眞實の佛法を求める居易の心には、道教主義政策にとり入つた禪よりの脫皮も、彼の性格（后述）を考えれば否定できぬことであろう。この派の禪が道家的色彩をもつていたことは、如滿の語をもつても充分うかがえる。いま、順宗との問答を記してみよう。

唐順宗問、佛從何方來、滅向何方去、旣言常住世、佛今在何處、師答曰、佛從無爲來、滅向無爲去、法身等虛空、常在無心處、有念歸無念、有住歸無住、……師答曰、佛體本無爲、……〔景德傳灯錄六〕[32]

道家的色彩をもつ禪との交渉が次第に薄くなり、逆に淨土教により強くおのれの救濟を求めてやまぬ彼の精神生活を、別の生活から窺つてみよう。

それは彼の性格に大いに關係のあることであるが、彼の全生涯を通じて窺える比較的消極的な生き方（后述）、ひいては世俗の利權に對して浮身をやつすことを少くさせたことにも、いささか關係をもつ。

時の新進中央官僚の多くが道家的なそれであつたのに、道家臭の強い禪の精神生活からの離脫は、また彼の周圍の官僚群の關係などより考えて世間的な立身よりの後退を意味することにもなろう。「黨爭の外に身を置くことは、官職地位の爭奪から離れることである。若き日の翰林の同僚の六人のうち、五人が宰相になつているのに、彼だけは閑職に終つている。文學によつて生前に盛名を博すること彼に及ぶものはないといわれている、その盛名が武宗の卽位の際に、彼に宰相の地位をもたらしかけた。しかし、時すでに彼は七十歳、年齡がその幸運をつかむことを許さなかつた。しかし、彼は不幸ではなかつた。名利よりも文學の中に、彼は生きることの滿足を見出していた[33]」とは、特に晩年の彼の精神生活をえがいて

餘りある。まことに世間の名利よりも、文學の中に生きる彼であればこそ、必死の願いをもつて文集の永生をこいねがうのであつた。しかも、この切なるねがいは、はかなくも彼の淨土を意識する心境につらなるのである。

しかし、彼の淨土教信仰が決定的になつた折りにも、「坐禪をして入定し、女がよぼうが妻がよぼうが返事もせぬ」とうたい、また「足がだるいから坐禪する」などとうたう。信仰の純一性をとわぬ居士の歩みであり、このことは彼の葬られた場所が、師如滿の塔側ということにも連なる。文人の奇しき運命を告げるか。文集はゆくりなくも居易の信仰の推移と信仰の一類型を後世に說く。（昭和三十九年度文部省科學研究費による研究成果の一部。）

1 景德傳燈錄・四卷
2 南嶽懷讓法嗣、貞元二年寂。傳燈錄六・宋高僧傳十・祖堂集十四などに立傳される。
3 唐・順宗期、傳は傳燈錄六・會元三など。
4 馬祖法嗣。元和九年寂。傳は傳燈錄六など。
5 大唐韶州曹溪寺寶林傳。十卷。宋藏遺珍上ノ三・四。
6 禪宗永嘉集。唐明道玄覺撰。大正藏四八の二。
7 唐・圭峰宗密撰。二卷。大正藏四八卷の二。
8 據花園大柳田聖山教授油印本。
9 卷九・六頁表。（那波本による。下同）
10 卷六・二〇頁裏。
11 卷一五、二三頁裏。
12 卷一八、六頁表。
13 卷五七、二三頁裏。
14 卷六五、一頁表。
15 卷六六、二六頁表。
16 卷六八、四頁表。病中詩一五自解
17 卷一七、二〇頁表。與果上人歿時、題此訣別兼簡二林僧社。
18 卷十六、二二頁裏。「昔爲東掖垣中客、今作西方社內人」
19 卷六一、一六頁裏。
20 卷六一、一七頁表。
21 卷六一、二一頁表。
22 卷六一、二二頁表。聖善寺白氏文集記。
23 卷六一、三五頁表。蘇州南禪院白氏文集記。
24 卷七〇、八頁裏。畫西方幀記。
25 卷七〇、一〇頁裏。
26 卷七〇、一七頁裏。讚佛偈以下發願偈にいたる六偈。
27 卷六九、三一頁裏。答客說。
28 劉禹錫・會昌二年七月。元微之、太和五年七月。崔羣・太和六年八月。崔玄亮・太和七年。
29 野上俊靜著・唐末佛教の一齣。結城論文集五〇四頁。
30 水尾現誠著・善導教學の一視點。印佛一二卷・二。二一一頁（昭和三九・三）
31 阿部肇一著・中國禪宗史研究、七三頁。
32 洛京佛光如滿禪師傳。傳燈錄卷六、大正五一卷二四九頁。
33 平岡武夫著・白居易の家庭環境。二六頁。東方學報三四冊。昭和三九年三月。
34 卷六八・十五頁表。在家出家。
35 卷六八・二頁裏。病中五絕の第四。
36 舊唐書・一一六卷、四部叢刊本一九頁。